

# 低年齢の気になる子どもへの発達臨床コンサルテーション

- 発達理解を通して、人に対する模倣をするようになった子どもの事例から -

○辻あゆみ・別府哲

(和光大学・岐阜大学)

気になる子・発達理解・模倣

## 1.はじめに

近年、保育所には、発達の遅れや偏りを伴う乳幼児が入所している。多くの保育者が、そうした子どもへの個別的な配慮の必要性を強く感じている。けれども、低年齢の子どもが示す行動は、障害に由来するものなのか、一時的に示すものなのかを識別することが難しく、保育者が困惑している実態もある（水内、2008）。気になる子どもに対する適切な支援では、具体的にどう指導するかではなく、子どもの発達理解に焦点化し、発達課題を共有することが大切となる（別府・別府、2014）。本研究では、この視点に基づき、保育者とコンサルタントが発達理解を通して、支援方法を検討してきた経過を報告する。同時に、その経過を通して、人に対する模倣をするようになった子どもの事例から、低年齢の子どもへの支援のあり方を検討する。

## 2.方法

(1) 対象者：A市B保育所0歳児クラス所属の女児。コンサルテーション開始時1歳4か月。生後9～10か月時に痙攣があり、A市大学病院に入院、点頭てんかんと診断される。保育者から「全体的に発達がゆっくりで、心配である」との相談があった。そのため、コンサルテーションを開始した。開始をするに当たって、保育所を通して保護者には了解を得た。

### (2) コンサルテーションの概要

コンサルテーションは200X年度内に全6回。コンサルテーションの参加者は、コンサルタント2名とコンサルティである対象児の担当保育者4名と主任保育者2名。各回のコンサルテーションの内容を表1に示した。

### (3) 発達の評価

安梅ら（2007）は、保育所や幼稚園で活用できる「発達のめやす」を作成している。本研究では、この「発達のめやす」を活用し、対象児の発達を評価し、発達課題を共有した。

表1：コンサルテーションの概要

回	訪問日	記録	概要
1	9・10	I期	対象児の観察・発達課題の共有
2	9・27		全体像の把握・子どもの気持ちの確認
3	10・11	II期	子どもの気持ちの検証・仮の個別指導計画の作成
4	10・25		個別指導計画の立案
5	11・29	III期	個別指導計画の見直し
6	2・17		子どもの変化を共有

## 3.結果と考察

第1回目に、コンサルタントが対象児の発達評価をすると同時に、対象児の気になることの聞き取りをした。ここでは、「指さしが見られない」「人への関心が乏しく、抱っこを嫌がる」「適切な操作をしない」が挙げられた。気になる子どもの保育には、子どもが

今どのような力を持っているか、どのような支援を手掛かりに次の力を獲得しようとしているかを把握する必要があるが、保育者だけでは子どもの力を客観的に見極めていくことは難しい。そうした場合、コンサルタントを介して発達理解をし、支援の方向性を見出していく必要があると考えられる。第2回目には、発達評価の結果を加味して、対象児の全体像、ならびに、気になる行動を示す際の対象児の気持ちを推察した。結果、「声かけに対して笑顔がないが、抱っこを求めていること」が共有された。これを「子どもの気持ち」と見なし、人に関わりを求める場面のエピソードを収集するようにした（I期）。本来、支援は、支援される子どもの気持ちに寄り添ってなされる必要がある。そのため、第3回目には、収集されたエピソードを分析し、仮設とした「子どもの気持ち」が適切かどうかをKJ法により検証した。結果、対象児が人と楽しそうに関わっている場面のエピソードが複数抽出された（図1）。それにより、対象児が人との関わりを求めていることが共有された。そこで、その気持ちに沿った仮の個別指導計画を作成した。

第4回目には、集められたエピソードから仮の個別指導計画が適切であるかどうかを評価し、個別指導計画を見直した。子どもの発達課題を明確になると、保育者は関わりを予定し、実践し、それを振り返るようになる（河野、2011）。それは、子どもの様子が拾いやすくなることをも意味しているのではないだろうか。II期にエピソード数が増えたことは、保育者が子どもの姿を観察できるようになったことを意味するのではないかと考えられる。

第5回目には、対象児が人と関わっている場面のエピソードが増加していることが確認された。人への関心が乏しい子どもであっても、人と関わりたい気持ちを有しており、そうした気持ちを満たし、豊かにしていくことが保育者には求められるのではないだろうか。そうした経過を経て、第6回目には、人に対する模倣のエピソードが増加していることが確認された。ここでは、『保育者が口を動かすと持っていた玩具の飲み物を「どぞ」し、その後、自分で飲む真似をした。おいしいと手をほほに当てると一緒にほほに手を当ててニコッと笑った』というエピソードが挙げられた。子どもの嬉しい気持ちは、保育者に共感されたり、褒められたりする中で芽生え、そうした関係の中で、子どもは人を模倣するようになるのではないだろうか。それには、保育者が発達理解をし、子どもの気持ちに寄り添い、関わっていくことが必要と考えられる。

